



「阪妻」といえば阪東妻三郎、目玉の松ちゃん、といえば尾上松之助——日本映画ファンなら今も多くの人
が知っている京都映画草創期の代表的
名優だ。京都には俳優だけでなく、日
本映画の父といわれた牧野省三をはじ
めマキノ雅弘、衣笠貞之助、内田吐
夢、溝口健二など巨匠といわれた名監
督、依田義賢、八尋不二など脚本家ら
が居住。名作を生み出す舞台となつた
地も豊かに存在した。それとともに東
映、大映、松竹のほか。独立プロを含
む驚くほどの数の撮影所が太秦(右京
区)を中心に各地にあった。その撮影
所では一作に賭ける監督、俳優を支
え、叱咤、罵声入り乱れる現場で汗を

京都の民主運動史 史跡散歩^{②7}

流し、持てる技術と腕を誇り高く奮つて駆け回った「カッドウ屋」たちがいきいきと活躍していた。
まさしく「映画発祥の地」にふさわしい土壌と活気が、京都には満ち満ちていた。
今、かつての時代ほどの活気がなくなっているのは残念だが、それでも日本映画の足跡をしっかりと辿ることができるのは、今の京都にしかない。
そして、再び日本映画の活気を取

京都日本映画足跡の宝庫



り戻そうという努力と活動が、世代を超えさまざまな形で取り組まれているのも、この京都が中心である。
間もなく終了するテレビ

小説「わろてんか」が敗戦直前の演芸映画など、国民の娯楽がどのように戦争と時代に翻弄されてきたかを描いている。映画は「国策に添わない作品」は軍部がフィルムをズタズタに切り裂いた。

京都映画も同じ憂き目を見た。どれほど多くの若くて有能な監督、俳優、カッドウ屋たちが無駄死にさせられたか。法輪寺(だるま寺、京都市上京区)には、戦死した映画人八百体を祀る「キネマ殿」がある。

各地に残る京都映画の足跡には、華やかな面だけでなく、「再び繰り返してはならない時代」をも、しっかりと警告している。
ちなみに『燎原』232号(昨年9月発行)の表紙で、谷口善太郎の小説『清水焼風景』が紹介されているが、同じ谷善の原作『狐の呉れた赤ん坊』が、戦後直後の時代劇第一作として、敗戦の年の11月8日に封切りされている。主演は阪妻、製作は大映である。京都映画はここから息を吹き返したのだが…。

(出淵とき子)

1月例会 京都労演の昨日・京・明日
岩崎草也『日記』のこと
レッドパーズ事件の体験
ある石碑の来歴を推理する 上
私の一期一会 本棚の考現学シリーズ 京都学連事件の栗原佑の場合①
研究ノート 京都婦人同盟の成立と女性たち ③ 京都婦人同盟の発
5月例会案内/会員消息/編集後記

16

土屋 安見	2
芦田 文司	8
岩井 忠熊	10
山口 利之	11
佐藤 和夫	12
井上 とし	14

京都労演の昨日・京・明日

土屋 安見

(京都労演事務局長)

例会は1月27日京都市職員会館かもがわで開かれ、京都労演事務局長の土屋安見さんが報告。「京都労演」の「労」は、苦勞の口ウじゃない、「勞」の一字に込められた思いと、鑑賞団体運動の意義を熱く語りました。

京都労演のタテ線の歴史を中心に話したほうがわかりやすいと思います、レジュメをつくってきました。もちろん

京都労演の誕生から最盛期まで

57年に京都演劇くらぶから移行

京都労演のはじまりは、1952年です。「京都演劇くらぶ」というものから始まっています。戦争中に解散させられたり、中心メンバーが逮捕されたりと、壊滅状態になっていた劇団が、戦後復活して、1950年代くらいから新劇運動が再開され、新劇ブームのような環境が現れてきました。新劇団の地方公演も広まってきた。ところが、当時、ほとんどが京都を素通りして大阪に行ってしまうという状況だったそうです。

そのなかで、何とか京都で演劇を観たいということで、当時、劇団「こうもり座」という地元の劇団が非常に活発に活動されていて、その観客動員を

私は1952年には生れていませんので、「京都労演50年史」や先輩方のお話から引用させていただいています。



していた後援会を中心母胎にして、「京都演劇くらぶ」が生まれました。

この「演劇くらぶ」は平均会員数400名で、会費は月50円だったそうです。当時京都の公演の状況は、新聞社などの主催公演が年1、2回くらい、その新聞社の公演を会員割引で扱う。

また地元関西の劇団の自主例会を行う。

この二つを軸に活動をされていたようです。今の京都労演のような完全な会員制の組織ではなく、会員制ではあるけれども、その中で自分の観劇したいものだけをチケット代を払って観ましようという組織形態でした。

関西の地元の劇団であるとか、あまり名前の知らない役者さんが出演しているような演劇の時には、観客が減る。ちよつと華やかなものだとかチケットが売れるという状況で、安定した運営ができなくて、非常に赤字続きで、大変な状況だったそうです。そのなかで安定して、劇団も安心して来てもらえるような組織にしようということで、1957年に「京都労演」に移行したということです。

これに先立って関西では、1949年に大阪労演が誕生しました。これが日本初めての演劇観賞会です。岡田さんという女性の方が初代から92歳で亡くなられるまで現役の事務局長ですと活躍されました。54年には神戸労演が生まれました。京都よりも神戸の方が先です。56年には東京労演が生れるというかたちで、続々と定額の会費で、安定して会員を組織して、そこで自分

たちの地元で演劇を観ていこうという会が各地で生れていきました。56年には大阪で「西日本演劇観客団体連絡会議」という関西の観賞組織が集った会議も開催されています。

第一回例会は「アンネの日記」

そのなかで京都でも定額会費を定め、会員を組織化して、大阪・神戸と連携して企画ができる鑑賞会にしようという動きが強まって、57年に京都労演が生まれました。京都労演40年史の時、亡くなった藤沢薫さんに「京都労演の想い出」を寄稿してもらった文章の冒頭を紹介します。当時の会場は八坂会館です。

「その日、八坂会館のロビーは興奮に包まれていた。見交わす顔はみな生氣に溢れていた。その表情まではつきり思い起こすことができる。1957年の2月、京都労演第一回例会「アンネの日記」の開幕なのだ。……幕切れ、アウシュヴィッツ収容所から解放されて、隠れ家を訪れたアンネの父、今は亡き信欣三さん演じるフランクが日記を手にして、「アンネのことを思うと私は慙愧に堪えないんです」。腹の底から絞り出すような悲痛な言葉が終ったとき、静かに幕が降りた。拍手の音を聞きながら、大きな安堵感に浸っていた。暖房のない真冬の客席なのに寒かった記憶はない。ロビーのあちこちで抱き合ったり、握手したりする光景が見ら



れた。私もその一人だった。」と書いていただいています。

八坂会館は冷暖房設備が無かったらしいですね。幕が上がると舞台の向うから冷たい北風がすうーと客席の方に押し寄せてくる中で、みんな興奮して第一回例会の舞台を観たんだと先輩たちから伺ったことがあります。その中でも寒くなかったとみなさんおっしゃいます。当時は、京芸や、くるみ座さんなど、劇団も元気だったし、自立劇団もたくさんあり、その力も大き

な原動力になりました。

職場サークルが牽引

京都労演発足時のサークル内訳は、学校関係が26、全損保7、全銀連14、官公庁21、金属関係の労働組合8、繊維関係8、中小企業55、その他で合計158サークル。

当時職場演劇では、京都機械こだま、市職サイレン、簡保劇研、府職演劇同好会があり、日本写真印刷、桎藤鉄工所など、13の職場サークルが盛んに公演を行っていて、作る側も観る側も一緒になって運動をされたと聞いています。

この当時は隔月で年6回例会、1300名の会員でスタートしています。第2回、第3回例会の時には2000、3000とうなぎ昇りで、当時は役者さんたちも一緒に各労働組合や学校を回ってサークルを組織するというオルグ活動をしながら会員を増やしていきました。

当初から大阪、神戸では毎月例会でしたので、1960年から約一年間、隔月と毎月とを併用して例会をしています。1960年にちょうど京都会館が開館しましたが、毎月例会に移行する大きな力にもなったと聞いています。隔月と毎月とを併用しますと、毎月例会組の人が観られたとていい芝居を、隔月例会組の人は観られないということになり、一年間かけて論議をして、

1962年から毎月例会に移行しました。

この当時の会員数は5500から6000くらい。分母が大きいので、一例会で100人くらい前後しています。前の例会が6800だったのに、次の例会が6600など、分母が大きいにだけに、退会、入会もダイナミックに大きな動きを繰り返しながら毎月例会に移行していったということです。

1万人に迫った会員数

最高会員数の頃は、バスの吊り広告を出したり、新聞に広告を出したりとか、一般的な宣伝を打つと、どつと会員が増えた時代だったときいています。新劇団の杉村春子さんとか滝沢修さんや宇野重吉さんなど、映画にもどんどん出演されて顔も名前も知られていく

私と演劇との出会い、

ここで話が逸れますが、私自身の京都労演との関わりをお話しします。

はじめは両親に連れられて

私は京都労演創立と同じ年の生れです。労演の下り坂の時期とちょうど重なるのですが、1971年、中学になった時に、両親が初めて労演の観劇に連れていってくれました。俳優座の「小

という時代であったと思いますが、杉村さんや滝沢さんが出になる例会には、どおつと会員が増えるという時代だったと聞いています。

1969年の4月の例会、文学座の杉村春子さんの『女の一生』の時が最高の会員数で9807名、京都会館で9ステージ、1週間以上、この頃大阪労演は1万、2万という会員数を保っていて、京阪神だけで計1か月、劇団が開催できたということです。

あの頃は良かったねという役者さん、早くあの頃に戻して、京都で一週間酒が飲めるようにしてくれと言われるのですけど。そんな物凄い時代が1960年代でした。そこからは右肩下がり、1985年が3000名台、94年は2000名台ということで、じりじりと下がってきた時代です。

労演との関わり

市民」という芝居でしたが、中学生には難しくて全然芝居の中身は覚えていないです。

ただ凄いなと覚えているのは、ちょうど最前列前から二列目の下手寄り、舞台に向かって左側の席に座っていたのですが、斜め横に花道があり、そこで芝居をされた。椅子から立ち上がる時に埃が舞い上がり、セリフをいわはると埃の中で、唾がばあつと飛ぶんで

す。「芝居ってすごいなあ、プロの役者さんってすごいなあ」というのが初体験でした。

次の例会が文学座の「美しきものの伝説」でしたが、これは私が観に行けなくて、両親が二人で観に行った。帰ってきて夢中になって凄く芝居を見たと話していたのを思い出します。

宮本研さんが文学座に初めて書き下ろされた芝居で、大正デモクラシー時代の出版関係でいうと堺利彦、大杉栄、荒畑寒村、芸術座の島村抱月、松井須磨子、青鞥の平塚雷鳥、伊藤野枝など綺羅星のような青春群像を描いた作品で、今は亡き太地喜和子さんなど、これも綺羅星のような役者さんが演じ、演出は木村光一さん、今なお観られた方はみな伝説のように語られる舞台で、帰宅した両親が、娘そっちのけで夢中になってしゃべっていた印象が残っています。

演劇は今の自分に寄り添うもの

三番目が俳優座の山本圭主演の「ハムレット」でした。中学生の自分にとってシェイクスピアというのは、文学史に出てくる、小難しそうなイギリスのおっちゃんが書いた作品で、英語の教科書に訳しなさいと載っていたり、どうもお勉強みたいな芝居だなと思っていたのですが、当時としてはすごい斬新な演出だったと思います。

鉄パイプでジャングルジムのような、

梯子のような舞台装置を組み、そこを山本圭さん演ずる若いハムレットが、ジャングルジムを上ったり、下りたりしながら、自分の親との葛藤であったり、生き方の葛藤であったり、汗びっしょりになりながら、悩み続ける、走り続けるという演出をされていて、自分とはかけ離れた世界の話だと思っていたものが、ハムレットは私たちのことなんや、芝居って、翻訳劇とか関係なしに、今の自分たちと寄り添うものなんや、それが演劇の魅力だと思いました。

この最初に観た演劇が私のベースになって、今まではまりこんできたような気がします。

必ず観る「美しきものの伝説」

演劇の魅力をいえば、「美しきものの伝説」については、その後も「美しきものの伝説」と聞けば、私は必ず観に行っています。

その後同じ木村光一さん演出で、新国立劇場でも観劇しました。また青年座の舞台も、それから京都でマキノノゾミさんが演出をして、京都のプロ、アマの役者さんを含め全てオーディションで選んで、春日小学校（当時）の講堂で上演したもの。映画の場合は作られた作品自体は普遍で、変わらないですが、演劇やライブは、その時々で、同じ作品でも同じ舞台は無い。いくら伝説のように話を聞いても、その時の

芝居は絶対に、二度と観られない。杉村先生が亡くなられて、「女の一生」は二度と観られない。一生に一度しか出会えない、その瞬間がライブの魅力なのかなあと感じています。

大学でサークルを作る

そういうことで演劇にはまり込んで、高校時代は演劇部に入って、自分も舞台に立って見て、これは舞台に立つなんて普通の人間にはできないものだ、とても私には無理やわと思いました、やはり劇を観るほうでということ、大学時代に高校の時の演劇部の仲間を誘って、自分たちのサークルを作ったのです。

それまでは父親の職場のサークルに加入していました。その頃は職場のサークルが中心で、当時演劇だけじゃなくて、父親の職場の方たちにハイキングに連れて行ってもらったりとか、職場のなかでの人間関係がとても良かった時代だと思っています。当時の京都労演も職場のサークルが中心でした。

それから大学のサークルも盛んでした。一会員二観客として客席に座って、観せてもらっていました。82、83年頃、当時蜷川幸雄さんらの商業演劇が盛んになってきた。

それまでは労演に加盟していなければ演劇鑑賞はできなかったと思います。が、ふんだんに資本をかけて作る商業演劇が大阪に来るようになり、役者

さんは太地喜和子さんと平幹二郎さんだったと思いますが、「近松心中物語」を観て、これまた凄くなあと思いました。

京都労演の事務局へ

それまで私たちが観ていた劇団の芝居は、とてもテーマ性が強かったのですが、娯楽性というかエンターテインメントとかそういう劇もあるんだという衝撃を受けました。

そんな話を労演事務局へ行ったら夢中になってしたのを、どうもこいつは芝居好きらしいということで運営委員になりなさいということで運営委員になり、劇団の関係や京都労演の会員のことであったり、運営のことだったり、82年、83年ぐらいから携わりました。

それまでの私は1981年に、竹中工務店の大工道具館というのが神戸にありまして、大工職人、建築職人などの、道具と人との関係を研究する企業内資料館・企業内博物館なんです。その学芸員として入社していました。神戸で仕事が終わると京都に飛んできて労演に携わるなかで、京都労演の前身局長が退任をされるということで、その仕事を辞めて京都労演事務局に入ったのが、1995年のちょうど阪神淡路大震災の年でした。

サークルの構成と年齢層の変化

初期の会員層が今でも中心

ここでサークルの変遷についてお話ししたいと思います。資料二番目の会員層の変遷をみていただくと、一つは男女比です。創立時代は男女半半です。それからだんだん女性の比率が多くなって、男性がだんだん減ってくる。それから年齢層でいくと、初期のころ1976年の資料では10〜30代は87%、40〜50代は13%、60〜70代が0%です。それよりもうちよつと前の資料になると80〜90%が10代・20代です。劇団や運営する側は、もう少し大人に観てもらうにはどうすればいいのかというのが悩みの種だったと聞きますが、この年齢層が年々後ろに倒れていきます。

実は京都のすごいところは10代・20代・30代で観ていた方が継続してずうーと観ている。今でもこの時代に観てらっしゃった方々が京都労演の中心を、背負っていらっしゃる。これは京都の特徴かなと思います。京都の皆さんの文化に対する深い思いであつたり、特徴の一つであると思います。なかなかそこが世代交代していかないということがあります。京都労演だけではない、どこの団体にもある悩みかなと思います。

職場、大学サークルの減少

もう一つはサークル構成ですが、1976年の頃は職場サークルが圧倒的です(42%)。それと京都は大学が多いので大学のサークルです(13%)。当時の機関誌をみると、芝居が終ると学生サークルが自主的に合評会を喧々諤々やって、あんな話、こんな話をしたと投稿されている。職場でも同じように、芝居を観た次の日に職場で話題になったという時代でした。

1976年は私がちょうど大学生のサークルをつくった時ですが、その13%に含まれているかと思います。以後、どんな大学のサークルが減ってくる。年齢の若い人たちの会員が減ってくる。ちなみに2011年は学生サークルが0%です。職場サークルもほとんど減って、友人・地域のサークルが増えてきている。

時代の変化のなかでの特徴的な変遷でもあるのかと思いますが、年齢が上がつてきて、定年退職等で、職場のサークルがばらばらになり、一方学生は、みんなサークル作つたり、会員制で縛られたりするのを敬遠し、自分の好きなことだけをするという傾向のなかで、友人・地域のサークルといつてもばらばらになってしまうのです。代表

者はもともと職場の代表者であつたり、大学の時の代表者であつたりしますが、その中の会員はお互いの横のつながりはないのです。

サークルといつてもお互いのつながりはなく、代表者を通じて蛸あしのように辛うじて繋がっている。かつてのアメーバのように生き生きとしていたサークルから中身が変化してきているのが、今の時代だと思っています。

社会と文化環境の変化も影響

そのなかで仲間を増やしていくという力も弱まってきているということもあります。1990年代は、職場サークルで40・50代が62%とすごく多かったのですが、今現役の人とはなかなか6時半に会場に駆けつけることができない労働環境。また子どもたちの教育費などで、経済的にも非常に厳しい中で、一番切り易い・ゆとりの文化的な部分から切っていくという傾向があるのか、現役世代がだんだん減ってきている。それから若い学生世代が先程話したように減ってきていることがあります。

そのなかでこれからのことを考えていかなければならない。そういう時代なのかなと感じています。

課題としての運営総参加運動

そういう変化の中、全国の動きは京都より少しずれるのです。京阪神は

1969年くらいに最高点に達していますが、全国的には少しずれて、70年代には一度落ちて、80年代に最高になっている。70年代、京阪神がサークル・会員制を堅持している時に、全国的には、それでは閉じた組織になってしまふのではないかと、もつと広く、街角のたばこ屋さんでも芝居のチケットが買えるような鑑賞会にならなければいけないのではないかとという動きが強まつて、サークルや会員制を崩していく一時期が、1970年代にありました。それで全国の会員が総崩れになっていく。1980年代になって、やはり違うんだ、会員制は大事だということ、また元に戻していく流れがありました。

その時に全国で提起されたのが、運営総参加という運動で、観ているだけのお客さんではないののではないのか、会員一人ひとりが主人公であつて、主体的に例会を迎えるということに、みんなが参加する運動形態にしようという動きが強まってきて、そのなかで京都・大阪など歴史が長い鑑賞会は、芝居と向き合うことの方が大事だと主張。全国ですごく論争になったのは、会員が主体的に例会を迎える、その欲びがあるからその芝居は素晴らしくなる。実行委員会などはそうだと思いますが、この芝居は私が作り上げて、これだけ会員・客席を満席にして迎えた、だから作品も素晴らしいんだ、という運動論と、作品そのものの評価はきちんとしなければならぬ。その評価をき

ちゃんと劇団に返していくことで、その観客は創造と関わる。もぎりや運営をするよりきちんと客席に座って芝居と向き合えというのが、どちらかといえど京都・大阪でした。

私はどちらも必要、どっちに傾いてもいけないと思いますが、京都では会員でありながら、会員がお客さん化したきたという流れは否めないのかなと感じています。

例会の成功が基本

会員が減っていても、会の運営は運営委員会がして、私たちは観にくわ、いつもいい芝居を選んで見せてくれてありがたいというような、そういう傾向が若干京都でも強まってきていると感じています。

一方でサークルの希薄化がある。京都では、サークル運動が非常に強かった、民主的な運動が強かったので、かつてはそういうことを言わなくてもサークル自体、組合もそうですが、生き生きと動いていた。それがだんだん希薄化していくなかで何か仕掛けていかなければいけないのかな、ということとで、2000年から京都でも、もう少し運営に主体的に携わろうという形態に、運営総参加運動に切り替えてきた。その時に例会本数も年8例会に移行しています。

これは会員の減少で、経済的にも年12例会が非常に厳しくなったというこ

とが一つあります。また作る側の事情、毎月東京から来てもらうことも非常に困難になったという事情から、年8例会にしながら、少しゆとりをもって例会の成功に向かって取り組んでいこうという運動を提起したのが2000年です。

運営総参加運動の実際

運営総参加の運動とはなんやねん、ということですが、単純に言えば、「会員がこれは自分の会ですよ」と思えるようにしよう。今、活動方針として掲げているのは、現在230くらいのサークルがありますが、①これは自分の会なのだから、自分の仲間を増やしていこう。②運営に参加しよう。③サークルがばらばらになっっている中で、協力しあえるサークルにしよう。ということとを掲げています。

実際に何をしているかといいますと、お手元に「2月例会『柳橋物語』の魅力!」を配っていますが、2月例会『柳橋物語』例会に向けて、2か月前からこの芝居に興味があるという会員さんを集まってもらって、みんなで芝居のことを調べたり、中身のことであったり、それを自分たちが知って、これは面白そうやねんと思ったことを周りの会員さんにも知らせていこう、その主体は運営委員であったり、事務局であったりではなく、会員自身が知らせていこうということ、作成しています。

これは昔は運営委員や事務局がつくって、皆さんどうぞと配布していました。それをみんなで一緒に手造りで作っていこうということです。今、そ

演劇を作る側の状況

三大劇団と青年座と

今度は、作る側の状況について話をします。

初期の頃は三大劇団、民藝・文学座・俳優座が中心で、年12例会のうち、三大劇団が3本ずつくらい。青年座の制作の方から、三大劇団の間に青年座を観てもらうために何遍足を運んだかわからない。そこに割り込むために日参するなど、我々後発の劇団は大変だったんだよ、という話を聞いたことがあります。

劇団自体数が無かった中から、青年座も新人会も俳優座から分かれた人たちが創られたということもありますし、昂なども文学座から出てきているというところもあります。そこから80年代以降、様々な劇団が登場してくる。

さらにプロデュースという形態もでてくる。「劇団」は志を同じくする人たちが集まって、こういう芝居をこう作っていこうぜ、この指とまれで、その中に劇を書く人、演出家の人、役者の人、制作する人を抱えて劇を作って

んな運営総参加を目指してやっているところで、みんな忙しい中で、なかなか大変ですが、そこが原点なのかと感じています。

いく形態ですが、「プロデュース」公演は、一人のプロデューサーがいて、この芝居にはこの役者さんたち、この演出家と、寄せてきてそこで作る。それがプロデュースです。その「プロデュース」公演が増えてくる。

私は、民藝指定席、文学座指定席、俳優座指定席と言われるほどに、老舗の三劇団の例会がずっと続いてきた時期に運営委員になりました。これだけ様々な劇団が登場してくる中で、もっというんな劇団の舞台も観たいという若手の声もあり、2000年に年8例会に移行する中で、今までの劇団との関係、新しい劇団、その中から私たちが何を観ていくのか、もう一度捉えなおしていきたいということもありました。

劇団は増えて鑑賞者は減少

作る側はどんどん劇団が増えてきている状況の中で、今全国の鑑賞会は非常に会員が減っています。それぞれ独立した形の運営で、その独立した鑑賞会が横の連絡をとっているというのが

「全国演鑑連」ですが、1997年には28万人だったのが、現在2017年の総会時、13万5200人です。団体数も最盛期に150弱あったのですが、昨年128団体です。

毎年総会ごとに3団体くらいずつ解散している状況です。128団体のなかで、800名以下の団体が69団体ある。800人以下、しかも300、400、500以下の団体も非常に多い中、日本全国のステージ数は減ってくる。そうすると当然作る側の劇団にも経済的なものとしてはねかえっていくという、とても厳しい状況にきている段階です。

京都労演も1023名で、何とか7例会2ステージを維持するのに、赤字を抱えながらの運営をしています。

厳しい経営の現状の中で

「全国演鑑連」は、12ブロックあります。近畿、首都圏、中部北陸、四国、九州、中国、北海道など、地域でブロックをつくって、劇団の公演が鑑賞会に廻る場合、なるべく効率的なコースを組んでもらう。

これも映画とちがうところですが、人間が動くので、たとえば出演者が6人でも、その後ろに、舞台を作って、照明であったり、音響であったり、それを作りあげて、公演が終れば舞台をばらして、次の公演地に移動するということで、14、15人スタッフが必要に

なります。舞台の上に20人役者さんが立っていれば、実際には35、36人の人たちが動いている芸術作品なので、できるだけ効率よくコースを組んで、芝居の規模にもよりますが、そのブロックの中で最低15、16ステージはないと、経済的に公演に行けば行くほど赤字が出てしまう状況になるので、この芝居が観たいというのは各鑑賞会が自主的に検討しつつ、ブロックで話し合って統一のお芝居を組むことになります。

ただステージ数が減ってくると、たとえば近畿でも近畿全体で15ステージありますが、たとえば四国なんかは、昔は四国だけで20ステージくらいあったのが、今は10ステージ切っている状況なので、四国だけでは成立しない。そうすると近畿と同じ芝居でコース組んでくれないか、というようになる。そういうことがどんどん増えていくと、今、基本的に年間6例会・隔月で開催している鑑賞会が多いのですが、劇団は今までだったら今年は近畿、次の年は四国というふうに戻れたのが、一つの作品で、1年間、二つのブロックでやるとこさっと経営が成り立ちます、という状態になってしまいうなかで、劇団にも経済的にも跳ね返ってきてしまうというのが現状です。

そのなかで、観る側もしんどい。劇団側もしんどい。どうなんねんという話ですが。

双方のニーズと作品選び

今、会員数が減ってくると観る側はどうしても、万人受けするような作品を望む傾向、最大公約数を望む傾向があります。

そうすると劇団側も今、テーマ性があったり、こういうことを表現したいということがあっても、ちょっとこれは噛みごたえがあり過ぎるかな、ちょっとむずかしいかな、みたいなことがあるとなかなか鑑賞会には回せないかな、そういうものは東京でやっておいてというような、二元の道に経済的に成りたつ作品と、どうしてもやりたい作品とを分けて、両方をバランス良く保ちながら経営を成り立たせようとする、そんな傾向もあります。

私たちが若い時代は、新劇団は社会に対してどうなんだというテーマ性、今、社会で問題になっていることを取り上げつつ、提示していくという作品が非常に多かったのですが、劇団が先ほど言ったような鑑賞会向きという作品づくりをするなかで、東京のなかで30代、40代の作家が主宰する小劇場で、かつての新劇のような、作品づくりをしてきているという傾向があります。

新しい挑戦の試みも

昨年の京都労演の例会で、劇団チョコレートケーキの劇をやりましたが、

その古川さんという作家が何をつくったか。天皇制なのです。

『治天ノ君（ちてんのきみ）』という作品で、明治・大正・昭和の三人の天皇をそのまま舞台にあげている。特に光をあてているのは大正天皇ですが、私たちの印象とはちがって、大正デモクラシーの中、彼は明治天皇がどんどん富国強兵に走っていくなかで、皇室はもっと開かれた皇室にしていかなければならないという、非常に民主的な天皇であったという位置付けをしています。その後昭和の日本が、また外へ外へ侵略していく時代のなかで、抹殺されなければならなかった天皇であったという位置付けをして、その息子である昭和天皇は、父親ではなく、明治天皇、富国強兵、強い権力を掲げられる天皇を目指すという、明治・大正・昭和の位置付けの中で、実際に天皇そのものを舞台にあげるといっても前衛的な芝居でした。

今若手の作家、いわゆる小劇場の作家たちがそういう芝居を書き始めている。その作家たちの作品を、逆に劇団が、じゃあうちにも書いてということ、今、若い作家と劇団とのコラボが始まっています。

劇団自身も一つの劇団だけではなくて、たとえば青年座と文学座が、それぞれその芝居に一番よいキャスティングを出し合おうよというような形で合同で一つの作品を作ったり、新しい作り方を目指すことも始まっている時代、

曲がり角になってきている時代です。そのなかで、私たち自身も何を受け止められるのか、劇団からの提示を受け

これからの鑑賞運動

人間関係がばらばらになり、芝居を観に来て忙しく帰ってしまう。昔のように芝居どうだった、分からなかったけれど私はこう思う、というような、芝居を観た後で喧々諤々の関係が作りにくい時代のなかで、それをもう一度、どう作っていくのか、それをやってい

止められる観客・会員をどう作っていくのか、これからのすごく大きな課題なのかなと思います。

かないと鑑賞運動みたいなものは成り立たないのかなと思います。

今、かつてより以上に、どんどん商業演劇ができています。

かつては商業演劇が華やかなエンターテインメントの作品をやっていましたが、今、たとえばチェーホフのよう

な名作であったり、宮本研であったり、かつて商業演劇ではとても手を出さない社会的なものを扱う作品を、どんなお金をかけて、いいものはいいい、それをいい役者でやれば、一万円でも観にくるよね、というような芝居の作りをして、大阪や兵庫の舞台にどんどん作品がくる。

たぶん京都でもロームシアターがこれからどんな動きをしてくるか分かりませんが、会館主催でそういう芝居が入ってくることもこれから先出てくると思われます。

そのなかで、この会員制で、言っ

みれば日替わり定食のように、これ食べてね、というような会のなかで、一万円のチケットで一人で観に行つて、ああよかったねと帰ってくるのとは違う何かをつくっていくかという考えながら、劇団とともに、何とか、何とか、京都のなかで続けていきたいと思っている、そんな今日の頃です。

あつちに飛んだり、こつちに飛んだりまとまりのない話になってしまいましたが、後は質疑応答をしながらお話をしていきたいと思います。

岩崎革也『日記』のいふ

はじめに

『燎原』第210号（2015年11月15日発行）に「『岩崎革也日記』を読む」とした拙文を掲載していただいた。研究会で読み進め同年7月におおよそ読み終えた。しかし、読みに誤りや不明の文字が数多くあるため、その後もさらに時間をかけて粗す作業を続けた。それらを終える段階で『岩崎革也日記抄』出版の準備を進めた。

「南丹市市民提案型まちづくり活動

支援交付金」制度に応募した。「地域の文化財史料資料保存継承の取り組み―旧岩崎革也邸に残された文化財史料資料保存継承の取り組み―」とする事業名を申請する。その後決定通知をいただき、書籍出版を目的とせず「まちづくり活動」の一環として進め、出版も併せて行い市民に寄与することに心懸けた。南丹市の制度の恩恵を一部受けることができたことを喜んでいる。

岩崎革也の『日記』には種々のことが記されている。会として注目した記事の特徴のいくつかを紹介したい。

芦田丈司

（京都丹波・岩崎革也研究会）

一 社会主義者たちとの交流

岩崎革也は幸徳秋水や堺利彦らの「平民新聞」発行にたびたび資金援助をしたり、丹後、舞鶴、丹波などに自ら出向いたり、書簡などで運動の前進のため努力したことがあった。大逆事件以後、社会主義運動は度重なる弾圧によって弱体化したが、堺利彦や高島素之をはじめとする者たちとの交流が続けられた。『日記』は1917年以後しか遺されていないだったので、それ以前

については社会主義者たちの岩崎宛書簡によらなければならぬ。ここでは、『日記』をもとに見ることにする。

堺利彦とは生涯交流を続けたことが『日記』で見ることが出来る。堺への発信また受信の記録も数多い。数点挙げることにする。

①1926年6月28日「堺利彦氏共産党事件の服罪本日入獄する旨挨拶状来る 十ヶ月期間（但未決通算百廿日）」②同6月30日「東京堺利彦氏へ入獄見舞状贈る」

③1928年9月1日「無産大衆新聞（第一号）堺利彦氏より送らる」④1929年2月26日「発信堺利彦東京堺利彦氏、市議選挙に勇躍、運動費を申込み（壹百円寄与郵送ス）」同3月5日 来信堺利彦 東京堺利彦氏

市議立候補宣言書到来す 同3月17日
東京市会議員総改撰 牛込区堺利彦氏 最高点 小石川区島中雄三氏 最高点 当選

官憲の内偵記録『社会主義者沿革第三』(「凡例」に「明治四十二年八月以降明治四十四年六月二至ル間ノ状況」とある)に岩崎革也の名が「堺利彦、陰謀事件関係者遺家族慰問ノ旅行顛末」に登場するのが最初である。それには大逆事件刑死者遺家族慰問を堺が行うにあたり、岩崎革也は300円を拠出した経緯などが実に詳細に記されている。以後、岩崎革也は社会主義者として内偵されたが、『特別要視察人状勢一斑第九』(「大正七年五月一日ヨリ同八年十一月一日ニ至ルノ間」)に、岩崎革也が高島素之の「国家社会主義運動開始ニ」「三百円ノ出資」をしたことを記録したのが最後で以後の記載は見られない。

二 大地主としてまた銀行経営に 関する記述

岩崎家は江戸後期に大地主であり、名望家であった。明治20年代でも旧船井郡で30町歩の小作田を持ち、4、5百石の小作米を得ていたという。米騒動の1918年における岩崎家の決算では小作米約380石を得ていた。岩崎は大地主として常に米価に注目し、その動きを数多く記していた。だが、大

正から昭和にかけての経済不況や金融恐慌、世界恐慌などによる打撃を須知銀行の頭取として克服する努力を重ねるなかで、米価や小作米などの記載は大きく減少した。父藤三郎が1894年に開設した須知銀行は一時11支店を持つにいたったが、特に銀行経営が苦境に陥る時期の苦闘を次のように記している。1932年3月14日「支払方愈窮す：重役会深更ニ至る」同15日「重役会支払窮迫」と記した。翌6日には「昨日宛てて町長の辞任書を提出す」となる。結局、中丹銀行に優良資産のみ買収されて解散、さらに私財70万円を投じて整理に専念した。

三 政治行政家としての 諸活動で貢献

須知町長を3回就任したが、いずれも病気等の理由で中途辞任せざるを得なかった。なかでも1923年に京都府議会議員に当選後に政治家としての力を発揮し、住民たちの要求を次々実現した。京都鉄道(山陰線)の下山駅へ至る須知、瑞穂方面からの道路の実現(「日記」1924年12月16日「竟に下山停車場道路の削除説少数なれば小額の減て予算成立」)、学校教育の発展充実、瑞穂須知間の道路建設、船井郡各地の要求実現などにその力を発揮した。これらの諸活動が「日記」に数多く記されている。

四 政治家たちとの交流

山本宣治は「日記」に数多く出る。岩崎が注目していたことの表れである。最初は1927年5月7日に衆議院補欠選挙の候補者としてであり、同7日に「山本宣治500」という選挙結果であった。翌年2月21日「開票日」として当選者名の一人に、山本宣治を記す。翌22日「無党派八名」「何れも無産党派の選良」の名を記す中に「山本宣治氏」と記した。翌28年2月8日に予算委員会で治安維持法により官憲の暴虐を鋭く告発した、山本が刺殺されたことを3月6日「日記」に「噫惜むべし 京都府第二区撰出理学士、四一才 昨五日午後九時五十分東京神田区表神保町光栄館にて代議士山本宣治氏刺殺せらる(旧労農党)(加害者七生義団黒田保久二、暴漢三七才)」と記した。岩崎は万感の思いを「噫惜むべし」と記した。

1932年5月15日には「犬養首相凶漢二官邸ニ射つピストル 午後五時過首相官邸に凶漢襲来して弾射す(六名の海陸軍人乱入) 午後十一時二十五分遂に逝去せらる 老政事家の末期可惜」と記した。岩崎は斎藤隆夫にも注目していた。1936年5月7日「本日議会に於て斎藤隆夫(民政党代議士)氏の陸軍大臣に質疑する軍民問題の論議は国民の総言議也」と記す。

す。斎藤の縮軍演説に拍手を送った。さらに4年後の2月3日「昨日民政党斎藤隆夫氏の議会ニ於ける首相ニ対する質問論は陸軍部内の激憤と為つて党代表演説の取消」3月3日「民政党代議士斎藤隆夫氏の舌禍問題にて議会除名決議二つき争論尚決せず(兵庫県選出代議士唯一の闘士)」、3月8日「昨日日本議会ニ於て斎藤隆夫代議士竟いに除名となる」と記した。斎藤は衆議院議員を除名されたのだ。斎藤を「唯一の闘士」と高く評価したのである。

五 晩年は

1935年前後から岩崎の国策遂行を願う立場の一面が現れてくる。1940年12月31日「多事怪奇にして内外大戦の昭和十五年紀元二千六百年も此ニ終つた 顧みれば昭和十五年は対外対内とも歴史的な転換を以て明け暮れた一ケ年であり同時に我国の全面に涉つて転換の質的方面を深め一切の政治力を強化し高度国防国家体制の確立に前進すべき昭和十六年への前提となる一ケ年であつた」と記す。翌年12月11日「：東亜共栄圏の新秩序建設上ニ於て大いに意義を深くして戦事大成功」と記すにいたる。岩崎は30、40代にかけて社会主義運動の支援者として活動したが、後年良心的自由主義者と思われる。それが岩崎の限界であつたのであろう。

レッドパージ事件の体験

岩井忠熊

1950年（昭和25）8月15日、2日後の誕生日を前にして、私がはなばなしくマスコミに登場したといえは人は驚くだろう。新日本新聞（戦後おびただしく輩出した新聞の一つで、間もなくつぶれてしまった）が、「赤色教授追放迫る」という大きな見出しで関西国公立大学の教員を名指しした。その尻に私の名前が出ていたという話である。私はようやく28歳になり、旧制の立命館専門学校専任講師のポストにつき得意然としていた頃である。社会的に全く無名の私がかんな形でマスコミ初登場となったのだから得意然からたちまち慙然になったのも当然だろう。

その当時立命の日本史には北山茂夫・奈良本辰也・林屋辰三郎というお歴々がならび立ち、そこにオマケのように若僧の私に加わったばかりだった。それらの諸先生は戦後民主主義の展開の中で学界、言論界で目覚ましい活動をされたから、レッドパージ自体の不当は勿論であるが、見ようによつては一種の有名税の観もあったといえる。だが私に限っていえば、辛うじて

数篇の学術論文を発表しただけだ。無名の自分が著名な諸先輩と同列に報道されたのが、納得いかなかった。私は立命の教員のなりたてで、多分、他学部の教職員にはまだ目にとめた方もほとんどおられなかったであろう。第一、「文科」（大学と専門学校を含む）の校舎は広小路の校地の飛び地になる、河原町通りに面した後の恒心館の場所だった。本部や法・経の人たちとはあまり接触の機会がなかったのが実情である。とすれば大先生たちの後にくっつけて私ごときチンピラをパージ対象者としてはじめて認識したのは、ほかならぬ文科の教職員のだれかと思えなくなる。そしてヒソヒソ声でその情報源が白川静氏にちがいないと伝わってきた。

立命のレッドパージが、学生団体・学友会会計担当者の公金拐帯・費消事件と一緒に、立命館財団が組織的に会計の背任を犯してあるうことか共産党に供出したとの新聞報道となった（立命館百年史編纂委員会『立命館百年史』通史2、2006年）。問題に学生団体が関わっているからということでは

武藤守一学生部長が中立売警察署に呼び出されて取り調べを受けるにいたった。そこで『立命館総長 武藤守一回想記』（編集・発行 立命館百年史編纂室、2006年。武藤氏の没後に遺族から寄贈された日記を主な内容とする）からの引用を許してほしい。

私は何回か中立売署に呼び出されて取調べを受けた。取調べ警部がいうには、大学内部の同僚からの告発によって調べるのですから、事実は明らかにしていただきたい。私はすでに窓を細目にあけてのぞいた教員ならびに学生に気がついていたので、驚きもしなかったが、不正がないことには確信があったので、さわざもしなかった（中略）それにしても同僚を売り大学を陥れようとする奴らの気が知れないと憤りを感じた。その教員が二十年後のいまでもいるのである。（○印は岩井による）

なおこの文章は「1950年12月学生部長辞任」の項目に出ている。20年後の回想であるが、武藤氏の遺族からの寄贈がなければ埋もれてしまったにちがいない私的なメモワールであ

る。その教員が白川静氏であることは当時の教員だった人たちならば誰にも分かるほど明白なことだった。

この問題で財団（当時の立命館は財団法人だった）の会計課が搜索され、山上会計課長は中立売署に留置された。私の記憶では橋財務部長も留置されたと思うのだが、『百年史』は山上課長の留置しか記していない。とにかく立命館学園の大騒動だった。ところが警察の調べでも結局のところ会計の不正などはまったく存在しないことが明らかとなり、一件落着となった。教職員の間では白川氏は道義上からいつて辞職すべきだとの声が広がった。責任を明らかにすべきだというのである。だが白川氏は定年まで在職し、名誉教授の称号を受けた。レッドパージ事件における白川静氏の問題はいつの間にか雲散霧消し、今ではもう学園の記憶から抹消された観がある。

そうなったについては白川氏のその後の動静が影響したといえる。事件後しばらくたってから白川氏は教授会にも出席しなくなった。教授会が人事等で定足数を欠きそうになった時に、在室する白川氏に連絡して出席してもらうことがあった程度である。白川氏は毎朝定時に出勤して個室にこもり、熱心に教育と研究に打ちこみ、定時に退出した。

私も、甲骨文にまでさかのぼって漢字の展開を明らかにした白川氏の研究業績が前人未踏の偉業であることを評

価するにやぶさかでない。この苦学力行の士が立命館大学から出て文化勲章を受け取るにいたったことは、立命館に39年在職した筆者にとって一つの誇りである。しかし歴史学徒のはしくれである私にとって、学園の戦後史のレッドパージ事件での白川氏の役割を抹殺することは到底できない話だ。今さらそんなことをほじくらないでもいいのではないかという人もいるかも知

れない。たまたま『失敗の本質 日本軍の組織論的研究』（戸部良一ほか著、中公文庫、1984年）を読んで、いわゆる「日本的組織」の特質をあらためて反省し、立命館学園の戦後史に考え及び、どうしても一言せずにはおれなくなつたまでである。

2018年3月3日識。

新刊 紹介

和田洋一著

『灰色のユーモア』

原版『灰色のユーモア』（理論社、1958年）。再版『私の昭和史「世界文化」のころ』（小学館、1976年）著者没後の三版になる。同志社大教授だった頃の和田氏の面影と活動ぶりを記憶する人

は多いだろう。戦前の人民戦線弾圧の厄にあった世界文化同人の回想。キナ臭い今日、なお読みつがれる価値ある一冊。

（人文書院、2500円）

ある石碑の来歴を推理する

（上）

山口利之

かつて本誌227号の第一面に取り上げられたことがある謎の石碑について、わが推理を紹介したい。

目測で高さ5メートル、幅約3メートル、厚さ約1メートル、つまり約15立方メートルの花崗岩である。

比重2.8として推定約40トンの巨石。古い石碑である。かつてその雄姿で周囲を睥睨していたのであろう。しかし今や地面に横倒しにされて眠っている。そこは遊園地「桃山城」の一隅である。

伏見桃山は秀吉の伏見城築城で知

られる標高約100メートルの丘陵である。昭和39年ごろ、私鉄資本がキャッスルランドと銘うちその桃山の頂上に鉄筋コンクリート造りの「桃山城」を建設した。遊園地である。近年、時代の変遷でその姿をとどめたまま余儀なく閉園したが、敷地内は自由に通行できるようだ。

その石碑は「桃山城」を西側に回ったあたり、日当たりの悪い片隅の草むした地べたに寝ている。遠目には船の形に見えなくもない平らに加工された石である。明瞭な文字が整然と並んでいる。明らかにこの石は何らかの石碑

である。それにしても大きな石碑だ。

戦前、伏見は軍都であった。京都第16師団である。いま藤森神社境内の「京都歩兵聯隊跡」の碑は語る。「かつてこの伏見の兵営より延べ十萬の青年が出征した」そして「昭和十九年レイテ戦において京都歩兵第九聯隊は聯隊長以下、全員軍旗とともに玉碎した」と。「桃山城」の石碑には建立の日付がある。昭和七年四月二十五日。次に続いて文字が整然と並列する。第十六師団司令部、歩兵第十九旅団司令部、歩兵第九聯隊、騎兵第二十聯隊、野砲兵

第二十二聯隊、工兵第十六大隊、輜重兵第十六大隊、京都聯隊区司令部、京都衛戍病院、京都憲兵隊本部、京都憲兵分隊。以上、京都第16師団全軍の名称が列挙されているのである。つまり、これは明らかに旧帝国陸軍第16師団の石碑であることを示している。

今それが遊園地の片隅に倒されてあるのは何故か。何故ここにあるのか。石碑は背中を見せている。背中文字列はこれを建立した者達の名である。碑文は表側である。碑文が見えない。石はその碑文を草むした土に伏せて顔を覆い倒れたまま立ち上がらない。まるで正体を隠しているかのようである。何せ推定40トンである。小さな墓石程度ならひっくり返せば簡単だがこの石はとても無理だ。表の碑文が読めない。いや、まさにこれは正体を隠している。（以下次号）

筆者〓一九四六年、京都市伏見区桃山生まれ。宇治市在住。

私の一期一会

本棚の考現学シリーズ

佐藤和夫
(本会会員)

若きドン・キホーテたち―京都学連事件の栗原佑の場合①

はじめに

ポール・ラファルグが妻ラウラの父親、カール・マルクスの個人的な思い出を書き残した。要約すると―マルクスはハイネやゲーテを暗誦していて談話のうちに引用したばかりでなく、ヨーロッパの古典文学に親しんでいたという。そのうち彼にとって、「ドン・キホーテ」は死滅してゆく騎士道の、つまりその数々の美德がようやく成立しようとしていたブルジョア世界の中で茶番となり、愚行となりつつあった騎士道の叙事詩であつたという。

しかし、あえて風車を巨人に見立て突撃するドン・キホーテがいなければ、「大いなる幻影」を演出する天皇制国家が軍隊や治安警察や監獄という鎧の物理的強制力で身をまとった官僚制度であることを立証することができなかったということか。栗原佑は古代奴隸制社会におけるローマ帝国主義に抗ったイエスと呼ばれた男に倣って人生を賭けたともいえた。

その1 社会科学としてのマルクス主義にみせられて

「燎原」第207号の表紙・京都の民主運動史「史跡散歩①」に京大学生集会所が1925年7月の学生社会科学研究会連合の第二回大会の舞台になった歴史的な場として紹介されていた。治安維持法の国内適用第1号事案「京都学連事件」として、38名が起訴され、野呂栄太郎、岩田義道など、1930年代の左翼運動の中核を担った人々が名を連ねていた。

そして、戦後の京都の民主運動史に足跡を残した栗原佑、泉隆、太田遼一郎らも被告だった。

その栗原佑（タスク・1904生、1980没）について、思いを致すことにする。

『戦後京都のあゆみ』（1988年刊、かもがわ出版）の絲屋寿雄論文が敗戦直後の「京都三大集会」を取り上げていた。「日本国政府は日本国民の間に

於ける民主主義的傾向の復活強化に対する一切の障礙を除去すべし、言論・宗教及び思想の自由並びに基本的人権の尊重は確立せらるべし」という文言を含む13の降伏条件を列記したポツダム宣言を受託したにもかかわらず、10月4日に占領軍より「政治的民事（ママ）的及宗教的自由ニ対スル制限ノ撤廃ニ関スル覚書」というGHQ指令で治安維持法が廃止されるまで、日本政府は思想犯の釈放をサボタージュした。わが栗原は、10月9日山科刑務所から釈放された。

しかし未完に終わったとはいえ、作業仮説にとどまっていたいわゆる「敗戦革命」の嚆矢は、京都においては、天下晴れての山宣追悼墓前祭（1945・12・20）だったといえる。

主催者は人民解放連盟（敗戦直後では非公然的の共産党に代わる公然組織）と社会党、京滋一般労働組合、近代日本研究会などだった。そして、翌46年1月18日には社共両党をはじめ18団体によって京都人民戦線協議会が結成され、26日には当面する運動課題を明示する京都民主戦線協議会（以下、民主戦線）と改称された。この京都民主戦線が主催者となって、2月10日に「河上肇先生追悼集会」と2月14日に「野坂参三歡迎人民大会」を開催した。

その2 「われわれのしごと」（大雅堂・1948年刊）の《河上肇先生と岩田義道君》記事に込めた思い出

「河上肇先生追悼大会」の司会者の選定にあたり、京都民主戦線の共産党サイドの連絡委員だった絲屋寿雄は京都民主戦線を代表して、末川博立命館大学総長（河上肇の義弟）に集会の司会選定を相談した。末川博は「政党や労組の代表などではなく河上先生に教えるを受けたものの中から誰かいないのか」と答えた。絲屋は京都学連事件の被告だった栗原佑の名をあげ、京大滝川事件の当事者である末川博の推薦ということで、京都学連事件の被告38人の一人・栗原佑が司会をつとめることになった。「河上先生から学ばねばならない第一のことは、学問に対する誠実な情熱だ」の思いを新たにしたいことだろう。また、野坂参三氏帰国歡迎人民大会では栗原宏子、恒子姉妹が花束を贈呈した。栗原佑の二人娘ではないかと推測する。

1946年4月16日、日本共産党京都地方委員会は、理論水準をたかめるため第一回共産党学校を河原町川端下がるの和風書院で開校した。主事（校長）は藤谷俊雄で講師陣は住谷悦治、西口克己、栗原佑、絲屋寿雄らだった。唯物史観・経済学・プロレタリア闘争

史などが講義内容だ。

栗原（42才）は、北牧

孝三（本会初期の世話

河上肇門下生が辿った闘争と学問の上での放浪

人・治安維持法犠牲者でもある元・京都市議)のすすめでその年の1月に党に再登録で、西口克己(33才)は新入党だった。

その3 治安維持法適用第一号事件の京都学連事件(1926年)と栗原佑

では、河上の教え子の栗原佑とは、どのような経歴で河上を偲ぶ集会の司会にあたるべき説得力がどうあったのか。

1924年9月14日に東京帝国大学で開かれた学生連合会(通称・学連)が学生社会科学連合会と改称し発足した。その翌年7月16日に第二回大会が京都帝国大学で開催された。その司会をつとめたのが、栗原だった。

1925(T14)年12月1日早朝、京都府警特高課は京大生、同大生らの下宿などをガサ入れし、33人を検束したが、公訴提起に持ち込む証拠が挙げられず、被検束者は同月7日までに全員釈放された。しかし、1926年1月15日から4か月にわたり全国的な一斉検挙が行われた。京大生20人、同大生4人、三高生1人など京都関係者を含む学生38人が起訴された。9月の予審決定後に事件の報道が解禁され、男爵家の息子とか三高教授(栗原基・英語学)の長男など、社会的な名士の息がいたため注目された。岩田義道(1932年警視庁で虐殺・野呂栄太郎(1934年品川署での事実上の拷問死)なども

その中に名を連ねていた。旧制三高(仙台)から京大にすすんだ栗原佑と鈴木安蔵とは、「貧乏物語」の河上肇のいた経済学部にはいり親交を深めていった。京都学連事件での逮捕は、二人の学的軌跡を隔てていったが、栗原の妹、俊子は鈴木と結婚した。

その4 栗原佑の闘争歴概略について

1926年1月の京都学連事件で、京大在学中に検挙され、禁固10か月。保釈後、京大停学処分中上京し、1927年9月東京産業労働調査所勤務。1928年の3・15弾圧では逮捕をまぬがれたものの、翌1929年の4・16弾圧との間で逮捕され、学連事件との併合審理となり、未決通算4年を食らう。1930年10月出獄、玉川学園教育研究所に勤務。1931年、三木本ラスキン研究所嘱託のかたわら労働農民党事務所で活動。1932年逮捕され、千葉刑務所。1933年、滋賀県膳所刑務所に移送。1934年、出獄後3か月を費やし、ブランドス著「ゲート研究」を翻訳。1935年、「ゲート研究」をナウカ社より出版。F・メーリング著「ドイツ史」の翻訳。1936年、妻帯し中国で仕事することなどを条件に転身警察に出頭することなどを条件に転向を認められ、京都学連事件の被告仲間だった太田遼一郎を頼り、渡航した。1936年12月、西安事件勃発、北平

では連日抗日学生デモを目の当たりにした。1937年9月、同盟通信の臨時雇いとして電信起こしのガリ切りをしていた。1938年2月、同盟通信を辞め、華北産業研究所図書館に勤務。1940年2月、京都大学に再入学。1941年1月、京都にて梯明秀、朝山新一、中井正一、富岡益五郎、真下真一、新村猛らと再会。同年3月京大卒業。4月より斗南書院に入社し企画編集に当たる。8月、社長応召のため退社。1942年9月世界経済研究所に就職決定し、大阪に立ち寄ったところ逮捕され、田辺警察署に留置された。1943年6月、起訴。犯罪事実はメーリングの「ドイツ社会文化史」の出版が共産主義的宣伝文書として治安維持法による6年の刑を受けた。1944年2月下獄し、堺刑務所に入る。獄友は以下の通り―太田武雄(典礼)、松本惣一郎、小野義彦、多田留吉、横田甚之助(甚太郎の誤りか)、灰田正一(正二の誤りか)、石栗良男などであった。1945年5月、ベルリン陥落。米軍の沖繩来襲の報をきく。8月15日の敗戦後、10月9日まで釈放されず。

栗原佑の「続未完の回想」所収の「一つの友情」(1950年3月13日記述)に1946年の再入党から除名までの心の軌跡を残していた。

―わたしは、はずかしいことだが、専門とする学科がないので、専門の殻の内にこもっている人とは、十分に委曲をつくして論じ、調べ、ともに検討

する力量がない。(一部略)京都では、わたしはあたかも学問の上の放浪者であって、そのために、わたしは、かげで嘲笑をうけていることを感じている。京都というところは、面とむかって罵倒するような「下品な」人のいない、しごく「住みよい」ところなのである。つまりわたしのような者には住みにくい所なのだ。

―そしてこのばくの誤りの中から、統一戦線の教訓をくみだしてくれることを望む。マルクス主義者、共産員ばかりが人間なのではない。思想を異にする人に対しては、その人が友人であるときはなおさら、心をひろくしてまじわるからこそ現実的具体的ヒューマニスト、コミュニストの義務ではないか。

―こうしてわたしは今、友だちらしい友だち、友情をもつてまじわるる朋友をうしなっている。党の内にも外にも、わたしは全く孤独でたっている。人々はわたしは朗らかで、わかかわしくて、面白い陽気な男だともっているようだ。(一部略)、この寂寞を知る人は、おもうに一人だにあるまい。

1926年からあしかけ10年のうちに、4度も治安維持法で収監され、出獄している時期にドイツ語文献の翻訳をすることで、辛うじておのれの学問的良心を堅守しつつも、「雑学の徒輩」と卑下する痛ましさを、私の如き学問に無縁のものにも切なく感じる。(続く)

京都婦人同盟の成立と女性たち

③ 京都婦人同盟の出発

井上とし

(女性史研究者)

年。出獄後郷里佐賀県で鉄工所経営、40年に妻芳子とともに中国に渡った、戦後帰国。芳子は42年、菊治は52年に死去。

女性たちの素顔を探して

中央組織である関東婦人同盟は1927(昭和2)年7月に結成され、その準備段階で「3か月後には全国20余県で準備活動が始まった」(田島ひで「ひとすじの道」とされる。京都でも同年8月、京都地方婦人同盟準備会を結成し、当連載②記載のように長文の檄文を発して呼びかけた。事務所は「田中上柳町三四 太田方」。田中地区の入り口にあった無産者新聞支局などと同居していたのである。現在の地図で確かめると、叡山電鉄出町柳駅の東側あたりである。檄文が撒かれた範囲はわからないが、労農党、評議会、支持者の家族の周辺と思われる(既出、拙稿「斎藤はる」という女性がいた」本誌226号)斎藤は勤めていた工場の争議の際にオルグに来ていた人に勧誘されて加入した、という。

運動史人物大事典』や国会図書館サーチ、ネット検索については、娘の力を借りた。

事務所住所表記の太田ともえは、斎藤はるをからの聞き取りでは看護婦とのこと。京大経済学部社研(学連)メンバーの永井哲二(1903—?)の妻。永井は25年暮からの京都学連事件で検挙・起訴された38名のうちのひとり。28年3・15事件では無産者新聞京都支局長であったため有罪。出獄後転向した様子。永井「転向手記」(顕真学苑出版部、1935年)は国会図書館デジタルコレクションで公開されている。

島崎こま子(1893—1979)

島崎藤村姪、「新生」「節子」のモデル。河上肇門弟の学生だった長谷川博(1903—1985)の前妻。こま子は羽仁もと子、河上肇の紹介で京大YMCAの寮母をしていた。博は3・15事件で有罪。検挙、出獄後はこま子とは連絡を絶ち、その後彼女は東京へ。このあたりのいきさつは、拙著『深き夢みし』(ドメス出版、2006年)でも取り上げた。

久保清子 日活撮影所勤務の久保

一雄(1901—1974)の妻。一

雄は同僚だった森田五郎(後述)らとともに労農党書記として日活争議を指導。3・15事件で有罪。非転向を貫き、戦後の東宝争議のリーダーとしても闘った。美術監督として映画界の関連した図書は多いが、清子に関しては不明。

浅井花子 1903年、熊本生まれ。

夫は日活映画技師・森田五郎。京都地方評議会婦人部長、戦後北海道へ。プロレタリア作家。(注1)

「京都日出新聞」に 1925年メーデー、翌26年2月7日の治安維持法・暴威取締法・労働組合法などに対する反対運動に「女優浅井花子が参加する」との記述がある。斎藤はるをもこの時期、エラン・ヴィタールの舞台に立つたことがあり、「女優」としても知られていたのだろう。

前川芳子(1903—1942)

同志社社研メンバー宮崎菊二(治)(1902—1952)の妻。宮崎は26年京都学連事件で検挙、大学中退。総同盟左派。評議会系の「全国労働学校協議会」に山本宣治、谷口善太郎らとともに参加。学連事件保釈後は労農党京都府連書記。3・15事件で懲役7

青木ふゆの(1904—1940)

富岡鉄斎の孫。歌人。京都府立第一高女在学中に佐佐木信綱に師事、「心の花」同人となる。歌文集に「微風」空は青し」。(デジタル版日本人名大辞典+Plusによる)

ここへ田中地区の女性数人が加わって中核となり、活動を進めたようだ。当時を伝える資料は少なく、僅かに無産者新聞、労働農民新聞に散見できるばかりである。

一年余の活動だが

27年3月の国際婦人デーは京都でも開かれた。同年9月の普通選挙法実施を前に討論会を開き、選挙中は労農党の演説会に参加し、ビラ撒き、アジテーターなどで協力した。また、

「……選挙戦(普通選挙初の27年9月25日府会議員選挙)を契機として目覚ましくも開始されている。同盟大会を前にしての各同盟支部の活動はすばらしい展開振りを示しているが、……支部発会式準備に、大会準備に今や婦人大衆へのアジテーションは猛烈を極めていく。暴露戦野である選挙戦によって、婦人大衆の政治への関心は高められたが、こ

れに加ふるに京都同盟支部は、我党の選挙干渉反対、暴圧反対の闘争に参加し、数名の婦人弁士は壇上より、婦人の政治的自由を要求し、狂暴なる専制支配の暴圧に抗し『官憲のサーベルとどろ靴は我々婦人大衆の要求をふみにじった』と憤激し、正体を暴露し戦った。

労農党の政治的自由の旗が高く掲げられるや、婦人大衆の政治への関心は高まり婦人参政権獲得の要求は燎原の火の如く燃え上って来た。この契機をとらえ同支部は更に婦人参政権要求のためのピラを数回にわたり散布した。一般婦人の婦人同盟への注意は注ぎかけられ会員、及支持者は続々として同盟の旗の下に集まりつつある。

あらゆる闘争を常に、婦人の政治的自由獲得の闘争へ高めよ!」(無産者新聞27年10月23日付)

12月5日、水平社夜学校で第一声を上げた。田中にはコロンペーパー福島工場、鐘紡支店、水平社の家庭婦人がいたので、水平社婦人問題演説会を開いた。前日12月4日評議会主催の福島コロンペーパー工場糾弾演説会は臨検の徹底的な暴圧によって出る弁士は悉く中止させられ、会場内をうろつき回り、少し声援すれば引つ張ると狂乱の限りであった。凶悪な干渉は聴衆の憤激を高まらせていった。なかでも福島協議団員は(全員14、15歳—17、18歳)は、堂々と立って工場主の態度を糾弾

し、一段と気を添えた。聴衆は5日再び集まり、争議中の女工、水平社の婦人ら50名余。婦人同盟の弁士が交々立って、婦人が如何に市民的自由を剥奪されているかを近くの福島工場主の実例や、鐘紡の女工寄宿舎制度や、水平社婦人に対する社会的圧迫を例よって暴露した。これによって聴衆は益々激昂した。しかし、前夜にも増した臨検の暴圧ぶりを憤激した聴衆に恐れを成して、解散を命じた。が、解散と同時に電灯が消され、そこで大乱闘が演じられた。聴衆に傷つくものも出たが、警官のサーベルも帽子もめちやくちゃに叩き折られた。すぐ田中夜学校にある婦人同盟事務所には正服私服警官十数名が押し掛け、家宅搜索する。そこで斎藤はるを達は家に帰れず、同地区の中で泊めてもらったのはこのときである。

以上は『京都地方労働運動史』(1959)に書かれている。斎藤はるを達は「いろいろな工場へ、闘争している現場へ応援に入っていた」といっている。しかし、実際の運動はさほど目立った形ではなかったであろう。婦人たちが闘争現場に入っているて応援した、というスタイルは初めてであった。

労働問題の激化を背景に、婦人の差別の桎梏化もあって、初めて婦人が立ち上がった状況を考えると、少数だがこういう要求が肯定されたのである。こうした運動は準備段階から続け

られた。だが、大衆には見えない組織の裏面で、組織破壊は行われていた。3・15事件である。わずか1年という活動期間。3・15事件という大混乱に巻き込まれたとはいえ、あまりに多くのものを失ってしまった。

婦人同盟の記憶

私は新日本婦人の会のごく初期に関わっている。まだ名前も決まっていないころ。名称の公募があり、京都では「婦人同盟」という名が強力であった。そこで、その頃の指導者に聞いた。「昔、そういう名の婦人団体があったそうや」とのこと。伏見区の人たちがそう言われていたように記憶しているが、あのころならば、婦人同盟にかかわった人たちもまだ現存していたに違いない。それも60年前のことになってしまった。わずかな活動時期だったにもかかわらず、戦中・戦後へ何がしかの記憶と伝承は受け継がれたともいえるようか。家庭婦人も労働婦人も学生も、全国単一の婦人組織は、60年を経て初めて再現したことを思うと、たとえ短期間であり、婦人論が多くの欠陥を抱えて居た時代としても、感慨深いものを感じる。

(注1) 和田 崇「浅井花子の人と作品 付・浅井花子著作目録」占領開拓期文化研究会の雑誌『フェンスレス』第4号オンライン版(2016/09/20発行)
senryokaitakuki.comを参照。

『燎原』の合本「電子ブック版」発売中!

CD-ROM 版 各巻頒価 3000 円 (送料共)

- 第1巻 (創刊号から第50号)
- 第2巻 (第51号~第100号)
- 第3巻 (第101号~第150号)
- 第4巻 (第151号~第200号)

*ご希望の方は、事務局まで電話またはFAXでお申し込みください。

京都の民主運動史を語る会 TEL&FAX 075-722-3823 (井手方)





川口是先生への思い

川久保雄二郎（長岡京市）

早速『燎原』を送って頂き有難うございました。湯山哲守先生の「川口是さんのこと」を読ませて頂きました。知っているつもりでも川口先生の知らないことがたくさん書かれていて。胸にジーンとききました。ひとこと。当時の社共統一を求める市民の動きは今では想像できないほど広く厚いものでした。しかもけつして単発的ではなく長い歴史をもっていました。だから「頑固」な川口先生が候補者として登場したと思います。いまの「野

寒中見舞い

川合一良・葉子（神戸市）

皆様にはお変わりなくお過ごしのことと拝察しております。私どもでは、一良は昨年三月、姫路循環器センターで治療を受け軽快、退院となり、二人は長男夫婦の家で一緒に暮らしております。何とか平穏に過ごせるのでありがたく感じています。本年もどうぞよろしく御願いたします。そして、皆さまのご健康と

ご多幸をお祈り申し上げます。
追伸 どなたにも御あいさつすることなく京都を去りました。私としては心残りがいろいろあります。（葉子）

「慰安婦問題」の記憶と継承

澤田季江（左京区）

3月18日に、しんらん交流館で「日本軍『慰安婦』問題を記憶・継承するために」の第1回のつどいがひらかれます。

2015年末の「日韓合意」以降、「これだけの問題も一件落着」というムードが、いわゆるリベラル派の中にまで広がりました。その一方で、被害女性たちは謝罪と解決を待たずに次々と亡くなっていきます。こうした中で、「この問題はあくまで人権問題であり、被害者本人の頭上を越えた政治的解決はありえない」「歴史の事実を歪めることも、いかなる戦時性暴力も許さないためにも『慰安婦』問題の記憶と次世代への継承を」と考える人々の共同が、京都ではかえって深化したのです。

アムネスティや矯風会などの人権団体はじめ、キリスト教や真宗大谷派などの宗教者、地方議会に意見書決議を求める会、毎週水曜行動に取り組むグループなど、京都で「慰安婦」問題についてそれぞれ別々

に取り組んできたグループや団体が一つになって「日本軍『慰安婦』問題を記憶・継承する会」を立ち上げるに至りました。今後は毎年3月に、共同の企画に取り組むことを決めており、今回がその第1回目です。新婦人も事務局として、様々なグループをつなぐ役割を果たしてきました。

私事で恐縮ですが、岩井忠熊先生の最後の学部ゼミ生として日本近代天皇制を学びました。そしていま勤務している新婦人府本部は、故・岩井圭子さんが副会長をされていた女性団体です。新婦人で日々、ジェンダー平等と平和をめざす運動に身をおく私が、とりわけ日本軍「慰安婦」問題には、特別の思いで取り組んできた所以もここにありま

当日は、韓国・南京・上海で撮影した「慰安婦」被害者本人から会場参加者へのビデオメッセージを流します。インドネシアの「慰安婦」被害者の証言VTRと解説もあります。シンポジウムのパネラーは、高校生・大学生・若い研究者と、未来に生きてゆく若者ばかりです。ぜひ、ご参加ください。

「会員消息」

退会 辻保夫（伏見区）西井弘和（豊中市）

編集後記



▼正誤表…P1の目次、書評 高橋直樹（誤）→高槻直樹（正）

▼ひさしぶりに「京都みなみ会館」で、珍しい16ミリフィルムの映画をみた。どうも映画のテーマは、「権力に対する反抗の原初形態は（盗賊）となる、シャージュの森のロビン・フッドを思え」というものかと一瞬早合点をした。ことは大

阪市西成区の通称「釜ヶ崎」を舞台とする路上生活者がスラム・クリアランスとかジェントリフィケーションとかいう「空間価値」の追加投資による排除にたいする異議申し立ての嚆のようだった。

▼いずれにしても、昨今流行りのインバウンド景気のパネとなる「民泊」も同じ現象なのだろう。

▼しばし待てよ、の思いとどまり考える時間すら奪われるところに資本の回転率が支配しているのか。（佐藤）

京都の民主運動史を語る会5月例会

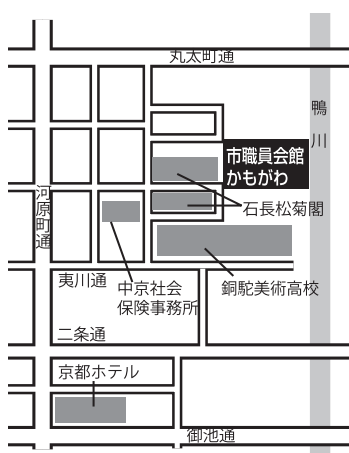
と き 2018年5月12日（土）午後2時～

ところ 京都市職員会館かもがわ第1会議室

河原町竹屋町東入、石長旅館の奥

テーマ 丹波の岩崎革也 — 社会主義者や政治家たちとの交流と支援 —

語る人 芦田丈司 さん（京都丹波・岩崎革也研究会）



幸徳秋水や堺利彦等と親交があり、『平民新聞』発刊、堺利彦による大逆事件の遺族訪問への財政的支援をおこなったことでも知られる京都・丹波の名望家岩崎革也、書簡や日記類が南丹市文化博物館に移管されその整理が進む。3月には、『岩崎革也日記抄』も公刊され、南丹市文化博物館で顕彰の講演会もおこなわれた。芦田丈司さんからこれまでの資料整理から明らかになった、明治から大正にかけての丹波の名望家、岩崎革也像の紹介をおこなって頂く。（今号の芦田さんの論考を参照下さい）。なお18年度総会・記念講演会ならびに懇親会は6月30日（土）午後2時～の予定です。

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料。会員外の方は資料代300円。